

しえんしゃ してん しんさい きょうくん かた  
支援者の視点から震災の教訓を語る

はんしん あわじだいしんさい けいけん  
～ 阪神・淡路大震災の経験から～

たくと みぞぶち ゆうこし  
拓人こうべ 溝渕 裕子氏

だい ぶ  
(第2部)

ねん がつ にち  
2008年6月3日

がくしゅうかいこうえんろく  
ヘルパー学習会講演録

じりつせいかつ たちかわ きょうかい しゅさい  
自立生活センター・立川ノヘルプ協会たちかわ主催

ご紹介いただきました、兵庫県神戸市で長田区という震災ではわりと被害が大きかった地域に事務所を置いております社会福祉法人えんぴつの家たくとは、同じ団体でNPOと社福とやっています。団体名が2つあるんですが、そこで活動している溝淵です。よろしく申し上げます。私は防災に関する専門家ではないので、みなさんのご期待に添えるようなお話ができるかどうか、みなさんとディスカッション形式で話していけたらと思いますのでよろしくお願いいたします。

先ほどは震災直後の被災された障害者の方の状況などをお話させてもらったのですが、聞いていない方もいらっしゃるの、その辺のお話をしてから、ちょっと提案のあった実際の支援の中身やそれを一緒に考えていけたらと思います。

私の所属している団体のご説明からさせていただきますが、えんぴつの家たくとと拓人こうべと名前が2つあるのですが、もともとそれは被災地障害者センターという任意団体です。95年2月に発足しました。震災まで何かしていたわけではなく兵庫県下の40箇所の作業所や小規模のデイサービス、当事者の会などの運動団体がこういう状況だから一緒になってセンター立ち上げて支援活動をしようということできた団体です。震災前から一緒に行政に対する制度の要求運動などいろんな取り組みを通じてつながっていた団体をもう一度震災をきっかけに再結成して作り直しました。神戸だけでなく、被災の状況も広くに渡っていた兵庫県のいろんな場所から来ていました。かなりの人数が作業所やデイサービスの方がいましたが、まったく知らない人ではなく、顔の見える関係でそれまでのつながりの中からはまず救援活動をしようということで取り組みました。直後はとにかく救援活動というか、地震が早朝におきて、安否確認で生きているのか死んでいるのかわからない、本当に命を助けるところからでした。もちろん助けたくても助けられなかった命もありましたし、介護者である人たちも被災に遭

い、また交通手段も閉ざされ、情報もない中で、手探りで動き始めた感じですよ。

それから13年経ち、介護派遣の事業をしているのですが、至った過程というのが、被災地で見た障害者の置かれていた状況でした。なかなか避難所に行けない、介護者がいない、お風呂に入れないなどの状況は決して、被災に遭ったからという問題ではなくて、たまたま震災で顕在化した問題だったのです。では継続して支援をしようということで13年経った今もいろんな形で、ヘルパー派遣など支援を続けている状況です。貧乏団体なのでお金がない中で、全国からのカンパや財団基金などの助成金や支援グッズを販売しながら活動資金を作りました。専従スタッフは全国から来ていたボランティアなどの中から長期で残れる人から早い段階から有給スタッフとして給料をお支払いして、有償のボランティアとして人材を確保し活動を継続してきました。その当時早い段階から10人くらいは専従スタッフとして仕事をしてもらいました。

震災直後というと、まったく情報がなく被災地神戸に何がいったのか、爆弾が落ちたのか、天変地異があったのかわからない状況で、理事の大賀が神戸市から50キロくらい離れた姫路市というところに住んでいて、そこは幸いそんなに被災が小さくなく、すぐに持っている情報の中からFAXを送り続けて、今被災地の状況がどうなっているのか、生きているのかということを送り続けました。当時、電話は通じなかったのですが、FAXは通じやすかったのでFAXという手段で情報を送ったのです。

えんぴつの家松村が理事長で、もともといろんなデイサービスやグループホームなどをやっていたのですが、養護学校で教師をしていた関係で、障害者の家庭の情報を保持していたので、そのメンバーの名簿をもとにみんなで手分けをして家庭訪問をし安否確認に奔走しました。もちろんそのときにボランティアがたくさん来ていましたが、

県外のボランティアがほとんどで、地理にも詳しくない人たちが地図を片手に回り、約800件の家庭を訪問して、会えばラッキーやけど、会えない人が多かったです。家に行ってもいない、次は避難所へ、そこでもいない、では次は病院かなと追跡調査をしながら安否を確認しました。作業所の職員なども安否確認に奔走をしておりました。もちろん作業所の職員、デイサービスの職員なども被災をしていたので、動ける範囲でしか、動けなかったり、家庭を顧みずに動き回ったり、不眠不休で活動していました。

そういう中で、被災地の現場ではすべての情報を把握するのは難しいので、人・もの・金といういくつかの大切なものに関して、大阪や東京、CILもそうですがいろんな団体に役割分担をお願いして、全国的に展開をしていきました。逆に東京の人からテレビでこんな情報が流れていたよということを経路に一旦入れて、それから被災地に届けるといって、ワンクッションもツークッションも置きながら情報を流すということをやらずとっていました。やはり、情報がないというのがみなさんすごく不安で、先ほど午後の部でもいたのですが、障害の方で視覚や聴覚の障害のお持ちの方はテレビやラジオから情報が得られず、消防のアナウンスや近所の人たちの「逃げる」という声が聞こえなかったりなどで避難がスムーズにいかなかったケースがありました。

そんな中で、一般の避難所には人が多く、体育館や教室で重度の障害を持ちながら避難するのはかなり厳しいので大阪の支援センターに避難所を設置してもらい、そちらに避難した方もいらっしゃいました。避難したからといって、その福祉センターの職員が介助できるわけではないので、全国からのボランティアの人たちを配置して、介護のコーディネートをしていました。避難場所だけではなくて、家はどうか助かったけれども避難所には行けない、でも余震が怖い、ライフラインがとまり水もガスもでなくて不便を強いられ

ている方がいて、水を届けたり、お風呂に行くなどボランティアを派遣することでまかなってありました。ボランティアにニーズが入ってくるのはどういう形で入ってくるかという訪問をして安否確認をして聞き取りをして、どうですかというところから始まって、何が足りないとか、こういうことで困っているとか、例えばお風呂に全然入っていないということで、ボランティアと一緒にお風呂に入りに行きました。

またビラなどを避難所に持って行って、高齢や障害の方などにビラをお渡しして、何かあったら連絡下さいとか、その場で直接お顔を見て何かありますかとニーズを拾って行った状況です。障害をもたれた方も、いろいろネットワークを持っているので、「あの人に聞いたんやけど、お宅の団体に障害者の介護してくれるみたいやな」という感じで連絡が来る人などが一番多かったです。障害者の方がまた障害者の方を呼び寄せてくれるとか、障害者のネットワークだと思うのですけれども、そういう形でどんどんボランティアに来て欲しいというニーズが上がって来ました。

その当時震災前は神戸もヘルパーがそんなに普及してなかったんで、例えば高齢の車椅子の方で週に1回しかお風呂に入れなかったけれど、逆にボランティアが被災地にたくさん来てニーズの中でお風呂に入りたいというニーズを出され、週に2回お風呂に入れるようになった方がいました。でも本来なら週に1回のお風呂よりも週に2回、3回で人間として当たり前前の生活をするにはそちらのほうが普通ではないでしょうか。では震災でボランティアがたくさんいるうちは、その人はお風呂に入って満足かもしれないですが、ボランティアが去っていった後、またこの人は週に1回の生活に戻るのかなって考えたときに、やはりそれは本来あるべき姿ではないと感じたのです。どうかこの人が当たり前前に生活できるようにヘルパー制度を求めに行ったり、それから県外ではなく地元のボランティアを発掘して、地元の人に活動

を継続していくような働きかけをしたり、どうかこの人たちが以前の暮らしに戻るのではなく、本当にあるべき暮らしをできるように行動しました。震災がある前はマイナスの暮らしでしたが、マイナスがゼロからもうひとつプラスになるような形でコーディネートを考えていきました。緊急救援ではあるのですが、その場だけのことでなくて長い目で見て、その人一人ひとりをどういうふうに支えていくか、もちろん本人がどうしたいかという意思を尊重して生活を組み立てなおすことが、私たちの活動のもとにありました。

そういう形で進めていました。コーディネートといっても、来ていたボランティアの人たちは始めて障害者の方と出会う人が多く、私も含めて被災地に入って初めて車椅子を押したという人がすごく多くて、コーディネートの手法もまったくわからないまま、とにかくニーズを聞いてそれに応えていく状況でした。数日前に入ったボランティアが障害者の方とやり取りをして、学んだことを次のボランティアに伝えていくというか、たまに介護の経験のある人が来たらその人に話を聞きながら活動を行っていました。逆に福祉施設の職員だったという人が来たときにやはり知識としてはあるのですが、福祉の形というのがあるのか応用が利かなくて、かえって一緒にやりづらかった印象があります。福祉の枠にとらわれない柔軟性が重要だということを活動を通じて感じています。

次に障害者の方の避難生活ですが、学校などの公共の場所はとにかく人が多すぎて入れなかったり、13年前ですので、洋式トイレは少なく和式トイレで使えない、トイレがあっても水がでない、大便が山盛りでとてもじゃないけど、排泄ができない状況がありました。階段ばかりの校舎でエレベーターも電気が止まっていると使えないし、学校にその当時ほとんどなかったと思いますけど、下がいっぱいだから2階に避難してください

いと言われても上がれないから、入れない人もいました。精神や知的の方で、多勢の中で何日間も過ごすことはとてもじゃないけれど、無理だということで最初から行くのをあきらめていた方もいらっしゃいました。このようにトイレの問題もあるので、水分を摂るのを控えて脱水症状をおこして、かえって体調を崩した方も多勢いました。

また車椅子のまま体育館などの避難所に入ろうとしたら、「ここは寝るところだから土足で入ってくるな」みたいことを言われ嫌な思いをした方もとても多かったです。助け合いの部分ももちろんあったのですが、一方でみんなしんどいから殺気立っていた部分もあり、心ない言葉もありました。障害者の方は公共の避難所になかなか行けなくて、結局自宅で余震に震えながら、倒壊しなくても、半壊やヒビが入った状態で、いまでも以前私が住んでいたところは戸がちゃんと閉まらないです。そういうところもすごく多くて、次に大きな地震が来たら潰れてしまうような状況下で過していた人もとても多かったです。ただ、自宅だけでは過せない、夜だけは避難所にどうしても泊まりに行ったり、避難所と自宅を行き来しながら過していた人や車の中で数日間過した方もいました。

避難所の次は仮設住宅ですが、当時は一般の人を優先に考えた建物で、郊外の交通の便の悪い山奥で、広い空き地に大きな仮設群ができて、とてもじゃないけれど高齢者、障害者の方が入るのは難しい状況がありました。もちろん仮設なので、狭くてユニットバスで一人では入れなくて入り口にも段差があり、スロープをつけてと行政に言っても、スロープひとつ付けるのに、何回も役所へ言いに行かないと付けてくれないときもあって、一つ一つが壁で、一つ一つ打ち破っていかないと仮設住宅でも過せない状況でした。震災のときは真冬の寒い時期だったのですが、夏も冬も越していくとプレハブなので、なんせ暑くて寒いのです。屋根は鉄板で暑さが直接伝わり、当時

はクーラーもなかなか行政は認めてくれなくて、体温調整の難しい方は体調を崩してしまい、何度も行政に交渉してつけてもらいました。それでもそこに長く生活するのは体力的に難しく、自分で賃貸の家を見つけて家賃を払いながら仮設以外の場所で避難生活を余儀なくされた方もたくさんいました。

また仮設住宅は住み慣れた場所から離れた郊外に建てられ、地域のつながりがないところにいきなり行かされ、近所の人は知らない人ばかりで、いままで助けてくれたおばちゃんなどのつながりをいきなり切られ、知らないところからのスタートでそのストレスで精神的なしんどさを抱えながらみなさん仮設住宅で過していました。また仮設の壁は薄いので、知的の方でちょっと声を出す人だと親御さんなどが気にして、やはりそのなかで長期は難しいということがありました。もちろん仮設住宅は車椅子のままでは入れない狭いところだったので、本当に大変でした。それがそのときだけだったのかというと、そうではなくて新潟の中越沖地震があったときも、やはり避難所では過しにくく、仮設住宅もバリアでバリアフリーではなくて、同じような状況が13年経ってもあって、よくなっている部分ももちろんあるのですが、あまり変わってない部分もたくさんあって、この13年は何だったんだろうと思いました。

先ほど言ったように作業所やデイサービスなどの地域拠点も多く被災しました。もともとそういうところはお金がないですから、高いビルやしっかりした建物ではなくて、少し安く古い建物も多かったですから、わりと被害に遭ってました。再建したくても先立つお金が無いから、再建も先延ばしで、だいぶ経ってからですが、復興基金が出て、作業所などはそのお金で建て直しました。震災直後は利用者も自宅待機で行くところがなくて、避難所や仮設住宅で過さざるを得なかった方もいて、一日も早く再開しないと、今まで通っていたリズムが崩れてしまって、家から出なくなっ

てしまった人もいたり、みんな必死でした。

ただ、大丈夫だった作業所やデイサービスは、その場所を地域の高齢者の方にも避難場所として提供して、そこに寝泊りなどをしてもらったり、作業所などはよくバザーをしているので、日頃から炊き出しグッズみたいなものがあり、寒いし豚汁でも炊いて、地域の人も提供しようかなど、炊き出しを率先して行ったりとか、バザー品でもともと古着とかを集めていたから、それをみんなに提供しようということで提供したりしていました。震災をきっかけに、いままでは作業所は作業所としてしていたところが、逆に地域の人とのつながりができてよかったという面もありました。作業所のなかでは、仮設住宅の支援を続けているところとか、震災のときを忘れないというイベントを今も開催しているところもあります。

知的障害の方の介護派遣事業のコーディネートをしているのですが、その知的障害の方の状況についてお話します。私が出会ったKさんは重度の知的障害で、作業所と定時制高校に通っていましたが、交通手段が全部ストップしてしまい、その人は海を渡って、埋立地にできた団地に住んでいて、その島を結ぶ橋も、阪神電車も使えなくなって、今までの交通手段がすべて使えなくなりました。その人に違う手段で通うんだよと言ってもその辺の理解がなかなか難しく、ボランティアと一緒に送迎をしていました。彼の送迎を通じてかなり考えさせられたのですが、その当時神戸市には知的障害の方に対する制度というものがなく、ボランティアと家族にしか頼る状況しかなくて、それではだめだということで、行政に対して制度要求をしました。ただただ行政に言っても、震災でお金がないとずっと言われ続けて、だから逆に神戸市にこういうものを作ったらいいのはと、こちらが調査・研究したものを提出して、こういうものを作りましょうと提案していきました。やっとやっとできたのが、震災から7年後の2002年でした。

ないものを一つ一つ作りたいてと思って、要求してもお金がないと却下されてしまいました。神戸市に関していうと、神戸株式会社と言われていて、建築・土木系が大好きで福祉にはあまり使いたくない市で、いままうかな？震災が起きてすぐに神戸空港を作ることを明言して、その変わり福祉は切っていく、生活保護に関しても、障害者の方が被災しケガして入院しているときに、入院先に生活保護を切りますという通知がいきなりきて、その人は退院したら、生活保護はもらえなくなるのか、自分の生活はどうなるのかとすごく不安に思っていたそうです。入院したら生活保護は一旦止められてしまうそうなのですが、行政のやり方として、何も説明がなく紙切れ一枚で生活保護を打ち切りますよという、案内だけがきてすごく不安な思いをさせるというのはどうなんだろうなと。家がつぶれて、ケガをして、自分がどうしていけばわからないときに、そういうことも、平気かどうかしちゃうかなと、お金を出すほうにはなかなか連絡をくれないけど、切るのはあつという間に連絡をくれるという状況でした。

知的障害でいうと、地域にこだわって生活をされていた方も多かったのですが、入所施設に避難のために行き、そのまま入所をされてしまった人もいました。それから震災でピアノが頭の上に落ちてきて意識不明のまま、生きる望み3%という方がいたのですが、高次脳機能障害で脳の損傷で短期記憶が飛んでしまったり、いままで話していたのに、話せなくなったり、感情がうまく表現できないような障害が残って、あまり聞かない障害者だと思ってしまうのですが、この障害がわかったのが、6年後だったのですが、その方は知的障害でも精神障害でもなく、身体は元気だし、ずっと制度の狭間で何も使えなくて、ずっと行政に働きかけどうにか知的障害の制度をもらいました。それでガイドヘルパーの派遣をして学校などに通うことができました。

また、私たちの団体に緊急避難の場所を作りました。震災、直後に大阪のほうに緊急避難の場所を作ってもらったのですが、その施設をまた再開しないといけないので、何ヶ月後かに出ていってくださいというのがありました。ただ帰ってきたところで、仮設住宅は当たらないし、とてもじゃないけど住むのは難しいし、他の避難所も難しいし、ではどうするのかというところで、行政に掛け合ったのですが、なかなか行政も公共の施設を貸してもらえなくて、それなら公園でも貸してくれということで、2つ借りて、工事現場のプレハブ小屋みたいなものを建てて、そこに避難生活をされていた方が何人かいました。そのプレハブも知り合いの労働組合にお願いをして、調達してきてもらい、結局行政はそのような個別の支援はしてくれませんでした。

ここに書いているAさんは知的障害で、母子家庭で主な介護者がお母さんですが、倒れてきたタンスに挟まれて、足を骨折し入院されて、その間の暮らす場所としてプレハブに避難してきました。そのプレハブは県外から来たボランティアの宿泊場所にもなっていたので、ボランティアと一緒に過ごしてもらいました。そのAさん自身はその暮らしが気に入って、全国から若い人がたくさん来て、全国に友達ができたという感じで、結構気に入っていました。

Bさんは24時間365日介護者が必要な自立障害者の方です。彼の場合は、介護者が大勢被災してしまったので、介護者の確保がとてもじゃないけどできなくなって、今までは自分で介護者に連絡をして、コーディネーターも自分でして、来てもらっていたのですが、それができなくなり、緊急避難場所で県外から来たボランティアに介護について教えながら、一緒に生活をしていました。その人は身体も手も足も動かさず、話すのもなかなか言葉がでないで、文字盤で一つ一つ字をおって、自分の思いを伝える方なのですが、もちろんよその県に逃げたら、そのほうがいいのかで

きたかもしれないけれど、やっぱり、自分は神戸の被災地のなかで、被災を経験しながら生活をもう一度組み立てていくと、被災地神戸に居続けた心意気の持ち主です。その思いに共感して介護者もその人にたくさん育ててもらいました。

次にCさんですが、この方は震災で自宅がつぶれ、ケガをして病院に搬送はされたのですが、野戦病院のようでしたので、何時間も病院の廊下で放置をされたまま、誰もが何時間待っても診てもらえない状態だったのですが、その人も特になかなか診てもらえませんでした。診てもらったあとに、その人は言語障害があって、医者や看護婦が彼の言葉に耳を傾けてくれなくて、福祉事務所と話して、「ようわからんから、大阪の入所施設に措置というか行ってもらいましょう」と彼の想いとは全然別のところで勝手に決められ、入所施設に措置されてしまったのです。車で運ばれているときもどこへ行くかをなかなか言ってくれないまま施設に行って初めてそこが入所施設だということがわかったのです。ただそのCさんもとても地域にこだわって生活されてきた方なので、一時的であろうとも施設の生活はやだということで、施設の入居を断り、私たちの避難所で生活を共にしました。

Dさんは自宅が全壊になりまして、Dさんが重度の重複障害で、お母さんは高齢で認知症がでていて、一旦大阪に避難し、2ヶ月後に神戸に戻って来たのですが、生活する場所がないので、そのプレハブで避難生活をしました。ただそのお母さんの認知症が状況の変化に弱くすぐく進んできて、息子さんにちょっと手をあげたりということも頻繁に起きたりして、介護者というかボランティアが隣の部屋で常に状況を確認して、たいていいるという状況があったらすぐに駆けつけて、「おかあちゃん、何してんの」と気をそらすような声かけをしたり、そのDさんをお風呂に連れて行くなどをしていました。そのお風呂に連れて行くということも、お母さんはわかっていたり、

わかってなかったりで、「どこに連れていくんや」ということもあったりといろいろとありました。今お母さんは亡くなられたのですが、Dさんは元あった自宅のところに、支援グループがあってその人たちと一緒に家を再建して、今は24時間介護をつけて一人暮らしをされています。

Eさんは精神障害の方で、アパートが全壊して一旦病院に行ったのですが、地域で暮らしたいということで、プレハブにやってきました。ただそのあとに仮設に行ったのですが、仮設のまったく知らないコミュニティの中で、症状が悪化して入院したり、仲間の家に行ったりでいる人などところで転々とした生活を過ごしていました。今はまた自分のアパートのほうにおられます。支援者というか私たちがよく言われたのが、県外ボランティアという立場で言うと、突然ふってわいたようにやってきて、一時的に先ほど言ったように、お風呂に週2回入れられるようになったりした人がいたりして、今まで送迎なんかも家族が全部していたところをボランティアなど介護をいろんな形で誰か他人に任せていいんだということが神戸の中にできてきたのですが、そのボランティアが去った後にその人たちの生活はまた元に戻るのかというところで、もともとやっていた地元の障害者団体などからは「変にかきまわさんといてくれ」みたいなことを思われた方もいて、話しながらその後の活動で和解をしたのですが、そういうしんどさもありました。

あと自立を妨げているのではないかと、ボランティアがなんでもして行政の肩代わりをしているのではないかと、神戸市が本来することまで、ボランティアがするから行政が何もしないんだみたいなことと言われたり、難しい局面もたくさんありました。でもその度に自分たちが守りたい、したいことはなんなのかというところに立ち返ったりしながら活動を継続して、自分たちが神戸でもう一度復旧というか、もとの形に戻すのではなくて、もうひとつ先の復興というか本来あるべ

き姿に戻したいんやということを訴え続けながら活動をしていくなかで、今は地元の人ともいろいろやれるようになってきたと思います。

それから13年経ち今現在は自立支援法というあまりよくない自立支援法ですが、神戸でも介護派遣は事業所が派遣しております。そういう意味ではボランティアの登場の場が以前よりが減ってきているのが最近気にはなりますが、ヘルパーとか事業所とかどうしても契約というところで動いているので、どこまでこういう緊急事態の時に、救援活動ができるのかなというのがあります。ヘルパーも事業者も同時に被災しますから、障害者の方の救援というのを誰がどうできるのかなとかいうのもすごく気になっています。私も実際に派遣のコーディネートをしているのですが、災害時にヘルパー派遣というのが実際できるのかということを見ると、検討する課題がいっぱいで、本当はやっておかないといけないのに、なぜかできていないのが神戸の実情です。東京のほうができるとんちゃうかな？というのも神戸で13年という月日が長いようで短いようでやっぱりまだまだ震災の時の痛手というか心の傷というのをみなさんすごく抱えていると感じます。ある方は、昨年精神的にも体調を崩されて、お話をよくよくしていたら、その方も地震で被災に遭って自宅が壊れて全壊になって、復興住宅と言われる住宅に入っている方ですが、「今になって、震災の時のしんどさがフラッシュバックとなって戻ってきて、精神的にしんどいのよ」という話をしてくれました。月日が解決してくれる部分と、逆にいまだからこそ感情にでてしまう部分があるのかと思うと、本当にそれを繰り返してはいけないのだけれど、まだ神戸の中で次に進めないようで、まだ復興できてないからなのかがちょっと気になっています。でもやはり、神戸もまた起きるかも知れないし、考えておかないといけないと、今回ちょっと、この講演に呼ばれたことで、かえってすごく私自身がこの講演に来させてもらって参考に

なっていて、また神戸に帰って、もう一回何かあったときに、どうするかを考えようよという提案をしたいと思っております。

また大事だと思ふことで、震災はよく想定外と言われ、中越沖地震の時も原発の事故も想定以上の地震でしたと言われるけれども、想定以上のことが起きるのが災害です。だから本当にそのことを想像してくれと言ってもたぶんわからないし、私も実際神戸の地震の被災自体は遭ってないので、その揺れとか恐怖をそこまでわかってないと思います。けれど地震の天災は止められないけれど、それをそれ以上ひどくしない人災はひどくしてはいけないと思います。もし地震が起きたら、起きる前に住みやすい街を作っておくことが一番の防災だと思います。なんどもきくと聞かれていますと思いますが、本当に日頃のつながりが大事な防災になるのだらうと思います。せっかく生き延びた命を本当に一番大事にして、考えていかないといけないと感じております。

司会：仮設住宅のイメージですが、例えば新宿あたりで地震が起きて、仮設住宅をこの立川あたりにたくさん建てられたくらいの距離があるような感覚です。住み慣れた場所から離れ、病院とか隣近所の人たちのつながりがなくなって、立川で言うと、高松駅や災害医療センターの近くに空き地がありますが、あのような空き地にいきなりブルドーザーが入って、土地を整地しコンクリートの土台もなく、杭をうって、板を張って、トタン屋根をつけるという簡易な住宅でした。雨が降れば、敷地内は泥水があふれ、部屋の中にまで草が生えるような状態で、室内温度は、夏は50度くらいで、隣の人がたばこを吸っているとその煙が部屋の隙間から隣の部屋にはいつてしまったり、電話の話し声が隣にも聞こえるような状態でした。ボランティアも140万人の人が神戸に入り、仮設住宅群では最大規模は1060世帯(1,800人)の規模でできて、そこにボランティアが砂利



をひいて水はけをよくしたり、でも砂利だと  
高齢者や車いすの人は通れない、次は舗装して、  
次はスロープがないからスロープを作ったという  
感じで、神戸の時はないないづくしだったので、  
必要に迫られて、溝渕さんも言われたように行政  
に提案していったりしていました。そのようなも  
のが仮設住宅でした。

溝渕氏：その教訓から新潟の時は、小さな村  
というか単位で同じ仮設住宅に入れたりする考慮  
はありました。私が行った所は公園で、それで  
も元いた村より少し離れたところに仮設が建てら  
れてそこに、アスファルトはひいていたのですが、  
そこに仮設を建てていました。ただ仮設住宅の中  
に車を入れてはいけないという変な決まりがあ  
りまして、車いすの方で常に自分で車を運転し  
て、自分で乗り降りされて生活をしている方が、  
仮設に当たって行こうとしたときに、車の横付け  
をしないと家にも入れないのに、仮設に車を入  
てはいけないということで、国の決まりが何かに  
乗っ取って、どうにか行政と交渉して車を入  
れることができるようになったということがあつた  
りで、本当にひとつひとつが壁で、ぶち破らなく  
てはならないことが、神戸の13年前ではなく今  
でもいろいろあります。

## 質疑応答

参加者：サバイバーズエリアをみんなが作らなくていけないと思った時は、完成までにどのくらいかかったのかと、どのくらいの資金が必要だったのでしょうか？

溝渕氏：全国に震災前から全障連、全国障害者解放運動連絡会議やDPIなどとも、繋がっていて、通信などで被災地支援というのを呼びかけてくれたり、各地で募金活動などもしてくださり、当時は1億円くらいの支援金が集まり、組織の運営であるとか、プレハブを建てたり、それにプレハブの移転費に500万円とかかかっています。また関係団体の作業所に出したり、支援をしてきました。また当時は被災地の財団基金が障害者支援を打ち出していたので、いろいろ申請もしながらやっておりました。

本当にいろんなつながりがあってよかったというか、なかったらお金がなくても活動をすぐやめなくてはならないような状態でした。被災地でも当時はたくさんのボランティア団体が立ち上がり、もともとのつながりがのたない団体などは、1年も経たないうちに閉じたりとか、活動のないうちに終息したり、経済的にもやっていけないと閉じるところもありました。

プレハブを建てたのは、震災後1ヶ月～2ヶ月後です。やはり労働組合のつながりがあり、神戸の労働組合はなかなか動かないのですが、大阪の労働組合は機動力があって、すぐに動いてくれて、かなり助かりました。物資などもみなさんたちが独自で集めて送ってくれたのですが、ただそのプレハブの中に物資を入れてしまったら何もできないし、ボランティアも住めない状況なので、どこからかバスを一台借りてきて、それを物資倉庫として使っていました。物はネットワークの中でみんながいろいろ駆け回って集めてくれました。

参加者：被災した障害の方はいっぱいいたと思いますが、そのサバイバーズエリアに来たほうがいいという優先順位という判断はどこでされたのですか。

溝渕氏：私もその当時はいなかったのですが、正確にわかりませんが、当時から顔の見える関係で活動をしていましたから、その中でこの人たちは避難所に行かないと大変だということやっていたと思います。また家が全壊した人で、まったく行き先がない人たちから支援していたと思います。家などを補修できる人はいいのですが、それすらもできない人たちに来てもらっていました。

参加者：この設立のところに兵庫県下の40カ所の関係団体で構成と書いてありますが、現在もその40カ所で構成されているのか、ある程度落ち着いたらそれぞれの団体でやられたのか教えてください。

溝渕氏：現在はつながりを残しつつも、構成団体としては別々です。震災救援ということでの当事者団体や作業所、デイサービスなどが運営員として参加して、どうやって被災した障害者の支援をやっていこうかと話し合いました。そういう意味での構成団体でした。もともと障害者運動をしていた人たちのネットワークでした。

参加者：兵庫県下のエリアというのは広くて、40カ所というのは、例えば東京で震災があったときに、どういうイメージなのでしょう？ 拓人さんは神戸を中心にされているということですが、兵庫県下40カ所で構成されているというのはどういうことでしょうか？

溝渕氏：その40カ所というのは、阪神間といわれる地域で被災が大きかった地域なのですが、

甲子園のある西宮市から神戸、姫路くらいまでの約100キロ弱圏内の作業時や淡路島に1カ所の関係団体があってやっていた。その当時、神戸と西宮市に被災地障害者センターのような支援基地を2つ作って、西宮は大阪に近いので、そちら方面からボランティアを受け入れ、神戸市は被害も大きく広いので私たちの拠点でやっていた。あと尼崎市や宝塚市は被災があったのですが、そこは元々の作業所などのネットワークで独自にできることはしていて、たまに手伝ってほしいというときだけ動いていました。常に生活介助で入っていたのは、神戸と西宮のあたりで一番ひどかった地域で活動していました。いま拓人は長田区ではうちが残ってやっていますが、いろんな情報などはお互いに現在もやりとりしています。

参加者：安否確認を800件したそうですが、その確認をしたあとは、どういう風に動いていたのですか？ニーズを拾って、それを行政に伝えたのか、それともご自分たちでされていたのでしょうか？

溝渕氏：まず、安否確認に行き、ニーズを拾って、ある人もない人もいるのですが、とにかく安全かそうでないかをあげてきて、もしそのときに行政に繋げる人、もちろんボランティアでできないことはそちらに繋いで、その橋渡し役もボランティアがして、直接動けることはしていました。それだけではなく、住宅の申し込みと一緒に手伝わったり、直後はがれきの撤去、水運びなど緊急的なことがすごく多かったです。その後生活支援に移行して、これからどうしたらいいのか悩んでいる人に、突然知らないボランティアが行ってすぐに心の悩みを言うのか、逆に「こんな言ったら贅沢」とか、「わががまま」とか思って我慢していた人たちも多かったと思います。徐々に関係性を作っていく中で、本当に求めているニ-

ズを少しずつ出してきて、一緒にしていくことができたり、「いつも来てくれるこのにいちゃんやったら頼みたい」とか、ボランティアも疲れてきて、ムスツとしてしまい、頼みたくても頼めない人もいたようなので、800件の中で信頼関係を作りながら、やれることはやろうという想いで活動していました。それをただ先ほど言ったように全部やってしまうと、行政の肩代わりになってしまうし、将来ボランティアがいなくなったときに、生活自体がだめになるから、声をあげつつ、勝手にボランティアがしてしまうのではなくて、一緒につぎはどうするかというスタンスでやっていました。

参加者：ボランティアさんも来られる方がすごくまちまちだと思いますが、活動にあたって何か工夫していたことはあったのですか？

溝渕氏：私たちは、ボランティアの人たちに10ヶ条というのがあり、これは気をつけようとか、ついつい燃え尽き症候群のようなかたちで、テンションもあがって何かやろうという人もいるので、ボランティアも無理はしないと、経験のある人たちや直後から入っていた人たちが書き残したものを教えてもらいながら、特に手法があったわけではないので、見よう見まねでやったりとかしていて、もちろん「お宅の団体はもういいです」とかいうのもあったと思います。やはり合う合わないというのもありますから、自分にあったボランティア団体を探しながらやっている人もいます。マニュアルがないなかで、経験やヒアリング手法とか知らないなかで学生やずぶの素人が体当たりの形でしたので、ちゃんと聞き取れたかなというのもありますけれど。。。。

参加者：被災地にそのまま残った人がどのくらい数がいたかということと、被災地で生活するよりも、私の知り合いも大阪まで12時間くらいか

けて車に乗って避難した人もいたし、また戻ってくるときのサポートをどのようにしたのでしょうか？

溝渕氏：800件のなかで一人ひとりがどうだったか全てを把握してないのですが、県外や親戚の家に身を寄せた人も多かったし、数ヶ月避難して、住宅を直してから戻ってきたり、帰ってきたらボランティアが手伝ってくれるという情報が入って「それなら帰ろうかな」という人もいましたし、仮設が当たれば、仮設に入居したり、仮設も何度も何度も申し込んでもあたらな人もいたし、1年以上避難所などにいた人も多かったし、仮設が当たっても遠い郊外に建てられ、そこが当たっても高齢者や障害者の人が住んでも買い物ひとつできないところに行くよりも、しかたなく避難所なりで過ごさざるを得ない人もいて、次にまた近い場所の仮設が当たるまで我慢していた人もいました。戻って来られた時に、必要な支援がボランティアなり、行政ができたらいいなというのはあったのですが、行政も混乱していたので待っていても来ないので、安否確認には行政の人はまったく来なかったという声も聞きました。地域に民生委員もいたのですが、ほとんど機能していませんでした。

司会：時間の感覚がわかりにくいかも知れませんが、95年1月に地震があって、2月から入居が始まり、99年末までの5年に近い期間仮設住宅で暮らしていました。仮設住宅の期限は2年なのですが、それをはるかに越えて仮設住宅での不自由な生活を余儀なくされ、その後やっと災害復興住宅に入居できるようになったのですが、復興住宅でも公募でなかなか当たらない状況でした。

参加者：以前震災から3年ということで98年に神戸で被災した障害当事者で介護のコーディネーターをしている人で、その人も仕事をしていて

一番障害者が人のネットワークをつくってきたのではないかとっていて、ここでも溝渕さんが人とのつながりということをおっしゃっていて、拓人の成り立ちからみて、やり方や人とのつながり方や地域の関係作りなどの他の介護派遣事業所とは違うところやポイントを教えて欲しいのと、ボランティアの経験がなくて職業として介護の世界に入ってくる人も今はいると思うのですが、そこでのギャップや考え方の違いをもし感じていたら教えて下さい。感じているなら、先輩として後輩など支援者になる人たちに対してどういうことを伝えていきたいか教えて下さい。

溝渕氏：私たちの団体はもともと介護派遣をしようとしてできたものではなく、救援活動からはじまったので、そういう意味では13年経って、色としては事業所色が強くなってきているのですが、先ほど言ったように二つの看板で、社会福祉法人と特定非営利活動法人というのをやっているのは、社会福祉法人ではやることにもいろいろ制約があって、ちょっと緊急事態が起きたときに柔軟に対応するために、もしかして必要になるのではないかとということもあって、NPOをおいていたら何かあったときに動きやすいのではないかとということで、救援活動やボランティア対応が必要なときにNPOを使い、普段は社福でというように棲み分けをしています。NPOとしては、直接の介護を拓人のほうでやって、地域でのつながりという意味で、長田区の商店街や市場で、市場もかなり被災して今ではきれいになっているのですが、大きなスーパーに客足をとられるから、個人商店は経営が厳しいので、そういうところに障害者の作業所などが入り、メンバーさんと交流をしながら商品を買ってもらって、市場を活性化させるようなつながりをつくったりしています。また市場の前で作業所製品を地元の小学生が売る「子ども市場」というのがあって、商店街のみなさんと共同でやって、障害者の方と

小学生が自然に触れ合っ、同時に市場も活性で  
きるし、普段のつながりをつくっておこう、それ  
が一番の防災でもあり、地域子どもから大人まで  
つながるといことを今も継続してやっています。

それから職員として、確かにいまは新しく入  
ってきた人で 20代だと震災のときは小学生の  
後半で地震と言われても小学校の記憶だったり  
するので、「あんどとき大変やった」といことを  
本当にどこまで伝えられるかは難しいです。たぶ  
んお年寄りの方で「戦争のとき大変やった」とい  
う話を聞いても若い子は「へええ～また同じこと  
言うてる」とか思うときもあったと思いますが、  
そんな風を感じているかもしれません。しかし、  
自分たちが震災から得た教訓を、拓人の職員で  
あるからにはどうか持って欲しいので、入って  
きたときに成り立ちから話をし、ガイドヘルプの  
制度化に力をいれ、ひとつの復興の形としても  
制度化させたかったので、ただ昔からあってそれ  
を使っているのではなくて、いろんな紆余曲折が  
あるなかで、みんなが声を上げて作ったのだとい  
うことを認識してもらうよにはしてはいるのです  
が、どこまで理解しているか、やはり実感として  
はわかりづらい部分なので、結構悩んでいるとこ  
ろです。

参加者：私たちも災害の前に地域でつながりを  
作ったり、行政に働きかけたりしていて、そこ  
でお聞きします。去年障害の仲間たちで、障害者  
の視点でこんなものがあたらいいとか、  
避難所にはこんなものがあたら避難しやすいと  
か、車椅子ユーザーの方の意見などを聞きなが  
らやっていたのですが、経験のなかで、こんなもの  
があたらいいものなどあれば教えてください。  
ボランティアとして新たな生活をサポートしたり、  
今までなかった制度を提言して作った過程を  
具体的ににお聞きしたいです。

溝渕氏：提言のほうですが、神戸市に知的障害

の方のガイドヘルプそのものがなくて、その当時  
「なぜ知的障害者の人に介護がいるの？」とい  
う感じで、「何で歩けるじゃないか」みたいな、そう  
いう次元から始まりました。だから、今どうい  
う生活をしていて、今後どのように生活をするのか  
などのニーズ調査やケアプランをモデルとして  
何人があげたりしました。また、東京や大阪でガ  
イドヘルプをしている地域があったので、どんな  
ことをしているか聞きに行ったり、ピープルファ  
ーストの東京などに行き、それをまとめた報告書  
を神戸市に提出しました。同時に例えば、Kさん  
はいまこんな生活をしていて、今後このような  
生活を望んでいるなどを神戸市の役員や親御さん  
や本人を含めてケアプラン会議や検討会をしてい  
きました。またガイドヘルプ制度ができたなら、こ  
ういうふうに使いたいとかこうあるべきだとい  
うのを提言していきました。それからバリアフリー  
の面でいうと、地震でたくさんの駅や学校などい  
ろんなところが壊れたので、直すときにエレベ  
ーターやスロープを付けるように要望しました。  
障害者の方たちの運動などが活発な地域はいい  
駅ができたり、意見が無い地域は何もないと思  
って作らないという風になるのかと思います。

直後は必要なものが本当に何もなくて、少しず  
つ戻ってきたときは必要なものも変わってきます。  
変な話物資はたくさん届き、有り余っている  
状態で、直後はおにぎり 1 つだけという状態で  
したが、その後物資が腐ったり、期限切れのもの  
を私たちの団体がもらってきて食べたりしてい  
ました。

参加者：避難所のイメージは、学校だといろ  
んな部屋があって、例えば、ペットはOKな部屋と  
か車椅子の部屋とか分かれていたのですか？

溝渕氏：それは実際、具合の悪い人は別の場所を  
使わせて欲しいという方もいました。新潟でもて  
んかん発作の人に一箇所別の部屋を用意してもら  
いました。神戸でもいくつかそのような事例もあ

りました。被災者の人数が多かったので、どこまでそれができたかはわかりませんが。また養護学校の一室を借りて、デイサービスの人たちが144日間避難生活をしたところもあります。養護学校だとバリアフリーで使いやすかったり、そこにボランティアが張り付いて、共同生活をしていて、最初のうちは共同生活も合宿みたいで、楽しめた人もいたみたいなのですが、それが何ヶ月にもなると、それがストレスになってしまったり、プライベートな時間もないし、かなり慣れた人で、バリアフリーがあっても、精神的な面で相当しんどい部分がありました。

司会：神戸の教訓を生かして、避難所では間仕切りとか、各被災地で使われています。当時は大きな体育館に、半分は遺体が安置され、半分は被災者がいるような状況でした。また、ボランティアでも遺体の搬送という仕事がありました。

溝渕氏：神戸のときは本当に何もなかったのですが、その教訓が少しずつ生かされているようになったと思います。

参加者：避難所のモデルみたいなものを神戸で作られていますか？

溝渕氏：聞いたことないです。福祉避難所についても、行政もあまりよく理解していなかったり、場所は提供しても、人は集めないの、障害者の人が来てても介護する人が誰もいないという状況で、確立はされていないかもしれません。逆に自分たちでこんな避難所があったらいいということを考えていけないと思います。当事者も介護者も含めてやらないといけないと思います。

参加者：例えば神戸の震災の後に、震災の時にもっとこれをやりたかったとか、こういうサポー

トしたかったなとか、無いに越したことはないのですが、また同じような地震が来たときに、ぜひこういうことをやってみたい、こういう支援のあり方があれば教えてください。

溝渕氏：たぶんしたかったことだらけですが、何をしていいのかわからない状況の中から、とにかく目の前にあるニーズに応じて体を動かすことが多かったです。さっき言ったようにボランティアだけでは限界はあるし、行政機関やいろんな社会資源がうまく機能するようになれば、もっと強力なサポートになると思います。ボランティアというのが、阪神・淡路大震災のときに「ボランティア元年」と言われ、増えたけれども、では、いままた障害者の人に関わる人というのが、ある程度ヘルパーとか施設職員であるとか、そういう人に限定されて来ているのかなと思います。制度的にも契約とかで、普通のボランティアや学生で資格のない人や主婦の方と関わる範囲を持っておかないといけないかと思えます。だからいままた神戸で地震があったら、ヘルパーも被災するし、動けないときに、動けるボランティアがいるのか心配です。

参加者：実際ニーズがあがってきたときに、応えられなかったニーズ、被災地で想定できなかったニーズとかはありますか？

溝渕氏：応えられないことや行政のやりとりとか、家の持ち主や大家とのやりとりや、直接の介護ではなくても、その人に関わるいろんなことでサポートが必要な問題に関しては、もちろんボランティアでは無理なので、例えば知っている弁護士さんを紹介したり、専門家、医療などになぎ橋渡しをしたり、行政に責任をもってしてもらえるようにするとか、できないというよりは何とかできるように手段を考えていった感じですね。倒壊しかかっている家に入っていくのは、物理的に難しかったりしたかと思えます。

参加者：いろいろみなさんが活動していく中で、いろいろなボランティア団体があったそうですが、行政や社会福祉協議会など、横の連携などはあったのでしょうか？

溝渕氏：なかったことはなかったですが、そんなに深くはなかったです。もっとだいぶ経ってから、やはり地域の社協や行政ともつながっていないといけないと、余裕がでてきた頃にそう思うようになりました。なかなか社協もボランティアを回していくという意識が当時は少なく、もちろんボランティアもいましたが、障害者の方も社協に言っても難しいかなとか、うちの団体が被災地障害者センターだったので、障害者はこちらにふってきて、逆に社協で対応できない人たちに対して、こちらの拓人に言ってくるとか、行政からそちらでなんとかなりませんかとか逆にニーズがあがってくるような状況でした。

参加者：社協のことで聞かせてください。やはり震災後ですか、神戸だけではなく一人で住んでいる方、障害者の方に見回り活動はどこでもしていると思うのですが、特別災害のときにあって、それ以前からは関わりはないのですか？

溝渕氏：あまり関わっていたということは聞いたことが無いです。自治体によって熱心にされていたところもありました。

司会：LSA(LIFE SUPPORT ADVISER・生活援助員)SCS(高齢者世帯生活援助員)というのがあって、仮設住宅での孤独死などの問題から、その必要性が叫ばれ、神戸から全国に広がりました。

参加者：被災したときに、家も大丈夫で無傷だったけれど、重度の障害者の人が助けも呼べないし、近所の人にも気づいてもらえなくて、例えば

餓死してしまったケースとかありますか？

溝渕氏：餓死までは聞いたことはないですが、一日くらいは飲まず食わずで助けを呼ぶこともできずに、家の中にいたという方はいました。関わっていた学生やボランティアがやっと駆けつけて、先ほども言いましたが、6階か7階のマンションでおぶって避難したというのはありました。

司会：餓死ではありませんが、こんな事例がありました。尼崎というところの仮設住宅で、お父さんがパーキンソン病で息子が24時間着病をしていて、息子は仕事に行かないと生活できない、でも父親を介護する人がいなくて、仕事ができなくなって、囑託殺人という事件になってしまいました。パーキンソン病で何も自分ですることができなくなり、ゴキブリが口の中に入っても取れなくなり、追い詰められた二人は、父親が息子に「殺してくれ」と頼み、事件が起きました。裁判では、憲法に保障されている25条の生存権が保障されていないと、国選弁護人が「被災者に対し、果たすべき責務を果たさなかった国家こそ、仮設住宅で一人寂しく死んでいった者に対し、遺棄致死罪の罪責を問われるべきである」「仮設生活を2年半も強いる国の『棄民政策』により心中以外に選択の余地がなくなったものだ」と主張しました。その裁判では、囑託殺人では珍しく弁護人の主張も認められ温情裁判として懲役2年という判決が言い渡されました。

溝渕氏：みなさんのご期待に添えなかったかもしれないのですが、東京の方がこんなに熱心に防災のことについて考えているということを知って、もう一度みんなに投げかけようと思います。こういう機会をただけて、逆に本当にありがとうございました。